

# 「深い学び」工夫を重ね



●●①

増えるだけではないか」と嘆いていた。「理念は理解できるが、事前の準備に手間がかかる」というのだ。

実際、教育現場のなかで、アクティブラーニング導入には温度差があるのが実情だ。

例えば、先行導入している学校の中には一部の生徒しか議論に参加せず、内気な生徒は黙って下を向くだけといったケースもある。こうした点を懸念する都留文科大の田中昌弥教授(教育学)は「内気な子や自信が持てない子はこの学校にもいるもの。一部の生徒しか参加しないと学力格差が生まれ、国が求める『深い学び』にはつながらないのではないか」と不安視する。

一方、アクティブラーニング研究の第一人者である溝上慎一・京大教授は「アクティブラーニングに問題があるのではなく、そうした生徒に必要な指導をしていないのが問題」と指摘。「社会人として必要なスキルを身につけさせるため、最初はうまくいかなくとも、生徒の反応や同僚の意見を聞きながら全員が参

「手応えが薄いんですよ」

大阪府内のある30代の男性教員はぼやいていた。平成32年度から順次実施される次期学習指導要領では、子供たちに教える量は現行と変わらない一方、教員に「主体的・対話的で深い学び」へ授業を転換することを求めている。アクティブラーニングとも呼ばれるこうした授業スタイルに、この男性教員も挑戦。電池の仕組みを体験的に教える授業を行った経験があるという、生徒たちにも好評だった。「子供たちの学びや成長につながったか分からない」と否定的だった。

評価の仕方も難しく、男性教員は「規定の授業時間をこなしつつ、新たに手応えが薄いアクティブラーニングをす

## アクティブラーニング授業の事例

**数学** 2次方程式の解き方をグループで考え、分からない場合は他のグループとも協力。話し合うことで質問する側も教える側も理解を深められる

**社会** 「女性専用車両」の是非についてグループで話し合った後に全員で議論。最終的に採決をとり、社会における合意形成の方法を体感する

**国語** 新聞記事を読んで文章と写真を使った説明の工夫を考え、意見交換して気づいた点をまとめる。情報の選び方や見せ方を自身の表現に生かす

※次世代型教育推進センターのHPから

## 「もっと知りたい」を伸ばすため

## 身近な教材 効果的に



燃料電池自動車の排気口から排ガスではなく、水が出る様子に興味深そうに見る児童ら  
＝2月23日、大阪市住吉区の市立東粉浜小学校

加えられるよう工夫を重ねるべきだ」と話していた。

導入に積極的な大阪市立東粉浜小の羽川昌広校長も「生きた知恵を学ぶ絶好の機会」と効果を強調する。

今年2月、燃料電池自動車「ミライ」を持ち込んで行われた同校の授業では、水素をエネルギーとし、二酸化炭素を出さない自動車に6年の児童らが実際に乗ってみた。排気口から排ガスではなく水が流れる光景に、児童たちは「煙が出ない!」と興味津々だった。

児童・生徒たちに新聞を使って学んでもらう機会をつくらうと、産経新聞では4月から「NIE@産経」のページを作り出した。掲載は原則として毎月第1土曜日。時事問題を分かりやすく読み解くだけでなく、家庭や教育現場でも活用してもらえよう、効果的な活用のヒントも提示していきます。



羽川校長は「便利さの裏側を知り、『もっと知りたい』という好奇心を培うことは子供の成長にとって重要。生活に身近なものを教材にすれば、関心を持ちやすい」と指摘。「肩肘張らず、先生たちも『自分も楽しもう』と思う気持ちの方が大事」と話していた。

一口にアクティブラーニング授業といっても、進め方はまだ手探り段階だが、こうした動きに教育産業も注目している。

例えば、ベネッセホールディングスとソフトバンクが共同出資した「Classi」は、各地の教員が行ったアクティブラーニングの授業動画を見られるサービスを導入し、教員をサポートする事業を始めている。教員間で情報共有でき、参考になる教材も見つかりやすいといい、担当者には「正解のないアクティブラーニング授業の一助になれば」という。

また、評価基準をどうすればよいか分からないという不安に応えようと、大手進学塾「河合塾」は、新たに問われる思考力や主体性といったものを判定できる高校生向けの新たなテスト「学びみらいPASS」を開発。各教科の知識量だけでなく、情報収集力や課題発見力などを測定したり、キャリア意識や文系や理系といった学習特性を測ったりするテストを行うことで、従来の偏差値にとどまらない、「新たな学力」の判定を目指している。

この連載は、藤井沙織、桑村明、猿渡友希が担当しました。